

環境と生物社会

島根大学医学部生命科学講座嘱託講師

坂本 巖

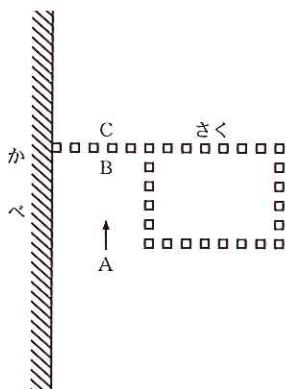
私達が、環境が良くない、または環境が良いと思うとき、無意識のうちに私にとって、私達にとってということが含まれている。生態学者は、環境を非生物的環境も生物的環境も含めて生物主体（個体、個体群、生物群集）と何らかの関わりを持っているものを環境という定義している（宮地，森）。従って環境は生物主体と無関係に存在し、また無関係に認識されるものではない。具体的には生物の生活を介して認識されるものである。また生物の存在は、その生物の関わりを持つ他の生物との相互関係によって生活し、生存している。

私は、汽水域に適応し、宍道湖の大型ベントス中の優占種であるヤマトシジミ *Corbicula japonica* と、その生活環境に注目して調査研究を行って来たが、ヤマトシジミと直接関わる他の生物との相互関係の研究に着手するにはあまりにもヤマトシジミの生活が明らかでなく、ヤマトシジミの個体群の研究に多くの時間を費やしてしまった。その間、宍道湖のヤマトシジミの繁殖期は5月下旬から9月上旬であり、雄、雌は同時性成熟であること、稚貝期の生活域は主に沿岸域の比較的水深の浅いところで、幼貝期は礫の多いところ、成貝は湖底の砂泥に多く生息する。つまり成長過程によって要求する環境は異なる。また環境への適応もヤマトシジミは生活適応は淡水でも可能であるが、繁殖適応は淡水では不可能である。これは、海水域から汽水域、淡水域に進出した時にみられる動物進化の特性を示している。

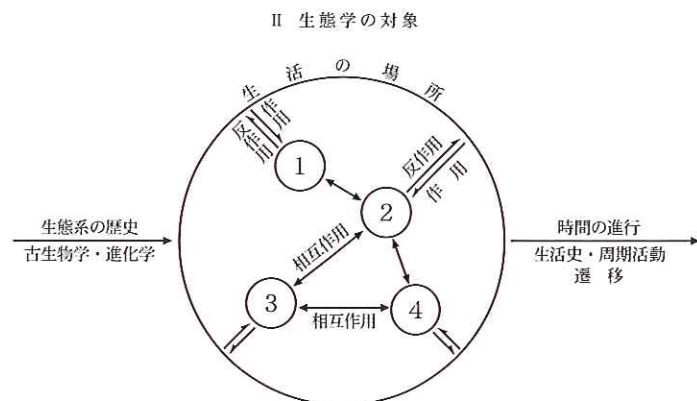
環境は生物主体と無関係には認識し得ない。生物主体の環境への反応を通して、具体的には生活の反応を通して認識される。従って、宍道湖のヤマトシジミの環境は、ヤマトシジミの生活を介してのみ認識される。しかし、ヤマトシジミは成長過程に伴って要求するものが異なるのであるから、多様な環境を要求する。これを知るためには、そこに生息する生物種の生活、種社会の解明が必要である。しかし、種社会の解明はそれほど進んでいない。まして生息域における生物種の生息が他の生物種との相互関係で生息をゆるがされているということは、そのメカニズムの本質的解明は今後に残された非常に困難な大きな課題である。

我々は環境を著しく改変し、そこに生息する生物に著しい影響を与えている。しかし、そのこと事体の本質的に認識することは困難である。環境認識は生物主体の認識がなければ不可能である。

現代のヒト社会の深苦な問題は生物種としての性質（人間性）の崩壊である。ローレンツは早い時期に指摘した。しかもこれは止められないであろうとも言った。私には、多くの人々が植物園、動物園、水族館、野山の散策を求めるのは、ヒト以外の生物種の生命にふれることによって日常の生活で失いかけているものを取り戻そうとしているのではないかと思われる。その様な意味でも三瓶自然館の存在の意義は大きいと思われる。現代の人々はあまりにも多くの情報を知ることの出来る状況にある。しかし素朴に接するものを鋭く感知する能力に欠けている。従って論理性を持った学術的説明が要求される。



第2.2図
環境の主體的評価の意義を示す KÖHLER の実験 (KÖHLER, 1917)



第1.1図 生態学の構造 (ALLEE らから改変)
1.2.3……は個体または生物集団

宮地伝三郎；動物生態学、P.26，P.5 朝倉書店 1961 東京